

フィルムレス時代の 検像を考える

画像情報の質と真正性の担保に向けて

企画協力：奥田保男 岡崎市民病院情報管理室室長補佐

PACS導入によるフィルムレス運用を行う施設が増えています。こうした中、デジタル環境下で「検像」をどのように実施していくかについての議論が高まっています。2010年3月には、日本放射線技術学会が『画像情報の確定に関するガイドライン』と題した画像情報の確定保存についての指針を示すなど、真正性の確保など、法的な観点も踏まえた画像データの運用が求められています。そこで、本特集では、行政や医師、診療放射線技師、産業界それぞれの視点からの「検像」について取り上げていきます。さらに、施設からの事例報告も交えて、質の高い画像データによる質の高い画像診断を提供するための「検像」とは何かを考えます。

フィルムレス時代の
検像を考える

I 検像とは何か

1. 検像の定義と フィルムレス下でのあり方 について

奥田 保男 岡崎市民病院情報管理室

モダリティの高機能化による画像量の増大化や、診療報酬における電子画像管理加算などを背景に、PACSの導入によるフィルムレス化が一段と進んでいる。こうした中、フィルム運用時に行われていた画像情報の品質確保や、患者情報・オーダ情報との整合性を確認するといった“検像作業”を、デジタル環境下でどのように実施していくかについて議論が高まっています。ここには、検査に対する一連のワークフローの中で、いつ、どのように行うべきか、情報の安全とは何か、法的にクリアすべき要件とは何か、地域連携を行うに

あたって考慮すべき要件とは何か、今後の診療報酬への影響はあるのかなど検討が必要ないくつかのポイントがある。

本稿では、これらのポイントを踏まえながら検像について考察してみる。

検像とは

検像の英語表記は“Quality Assurance for images : QAimages”であり、逆にこれを直訳するならば、“画像の品質保証”となる。さらに、日本放射線技術学会より出されている『画像情報の確

定に関するガイドライン』（以下、ガイドライン）¹⁾を参照すると、検像は、「あくまで画像情報を確定保存するうえで必要と思われる情報の確認行為」であり、「医師の診断・読影を支援する目的で、診療放射線技師が画像の確定前に当該画像を確認し、必要に応じて画像の修正や不必要な画像の削除を行う行為をさす」と定義されている。つまり、検像とは、診断の根拠となる画像情報の“質を担保するための重要な行為”と言える。

また、ガイドラインには、検像を行う手法について「特別な装置や機器および